

大学史 ニュース

第20号

2021年2月15日 発行

目次

特集『日本大学新聞』

- ◇創刊頃の日本大学新聞…………… 2
- ◇「幻の東京オリンピック」と学生勤労奉仕…………… 5
- ◇出征・入隊した教職員①…………… 3
- ◇箱根駅伝に8回出場した曾根茂…………… 6



日本大学新聞学会ルームにて（大正14年12月）

『日本大学新聞』創刊100周年

第一次大戦後、デモクラシー思想が吹き荒れる最中の大正10（1921）年10月、『三田新聞』（慶應義塾大学）、『帝国大学新聞』（東京帝国大学）に次ぐ、学生の手による3番目の大学新聞として、『日大新聞』が創刊されました（大正13年に『日本大学新聞』と改称）。以来、時代の変遷の中で、幾世代の学生たちに引き継がれ、さまざまな苦難を乗り越えながら、本年10月には創刊100周年を迎えます。

『日本大学新聞』は、常に大学新聞としての使命を守り、公平中立の立場から、学生・教職員・校友と点在する学部を結ぶ「全学園の機関紙」として、重要な役割を果たして来ました。積み重ねられて来た1400号を超える「紙面」は、激動の時代を歩んできた日本大学の歴史を、現在に伝える貴重な資料ともなっています。本号では、戦前の『日本大学新聞』の記事から垣間見える本学の歴史の一端を紹介します。



『日大新聞』創刊号（大正10年10月）

創刊頃の日本大学新聞

『日本大学新聞』創刊号は大正10（1921）年10月15日付で発行されました。発行当初は『日大新聞』と称し、大正13年9月より『日本大学新聞』と改称して現在に至ります。日本大学新聞発刊のきっかけは本学に「新聞学」の講義が設置されたことと深い関係があります。

本学の社会学科及び専門部社会科は大正9年4月、本学が大学令による認可を受けると同時に設置されました。選択科目には「新聞学」がありましたが、この講座の担当者は東京日日新聞記者の藤原勘治講師で、当時あこがれの科目として専門部社会科学者はほとんど選択したといえます。

政治科においては、「新聞と社会問題」という科目が専門部に設けられていましたが、これは新聞学というより新聞にあらわれた社会問題の講義でした。この講義の担当者が工藤鉄男講師で、二六新報や日本新聞で記者の経験がありました。工藤は大正7年より新聞関係の講座を担当しており、当時学生だった佐渡高一、池田正之輔、世耕弘一、吉田勘三が中心となって、大正8年に「日本大学新聞学会」を結成しました。この新聞学会は研究会や公開講演会を開催するなどして精力的に活動し、新聞発行を大学に掛け合い、ついに日大新聞創刊に到りました。

『日大新聞』の創刊の中心は前述の佐渡高一と池田正之輔でした。佐渡は在学中からアメリカの邦字新聞の東京通信員で、卒業後は読売新聞記者となりました。池田は読売新聞、報知新聞記者を経て昭和17（1942）年に国会議員に初当選し、昭和35年には科学技術庁長官に就任しています。このほか、講師だった工藤は大正13年の衆議院総選挙で初当選、昭和23年には行政管理庁長官として入閣しました。さらに、当時、日本大学雄弁会総帥だった世耕弘一は、欧州留学からの帰国後、日本大学教授となり、昭和7年に衆議院議員となりました。内紛続きの大阪専門学校の問題を処理し、戦後、近畿大学初代総長・理事長に就任しました。このように、日本大学新聞草創期の面々は、新聞記者、政治家として活躍した人物が多数います。

『日大新聞』は学生新聞として3番目に古い歴史がありますが、その他の大学新聞についても紹介していきます。慶應義塾は大正2（1913）年から、新聞記者志望のものを奨励する趣旨で課外講義として新聞科を設置しました。大正6年には学生自治団体「三田新聞会」が発足し、同年7月に東洋初の学生新聞である『三田新聞』が発刊されました。また、東京帝国大学の『帝国大学新聞』は大正9年12月に創刊しました。この2紙が『日大新聞』より古い創刊となります。

大正期はこの他にも多くの大学新聞が創刊されました。大正11年10月には明治大学の『駿台新報』、11月には早稲田大学の『早稲田大学新聞』が創刊されます。この時期の『日大新聞』には、「学生新聞連盟成らんとす」と

いうタイトルで、各大学新聞が連合して一つの団体をつくることは、新聞研究の上でも対社会的な面からみても意義があるという記事を掲載しています（『日大新聞』12号）。

大正12年12月15日、前述した『三田新聞』、『帝国大学新聞』、『日大新聞』、『駿台新報』、『早稲田大学新聞』の5団体が大学新聞連盟を組織します。この団体は有意義な社交機関である一方、啓蒙運動、学界の革新などに歩調を揃えていくというもので、第1回は普通選挙に関する5大学教員の講演会を開催しました。

日本大学新聞発行趣意書

國民外交、民衆政治の發達を高くして、社會の棟樑、輿論の代表たる新聞紙の使命たるや、愈更に重きを加へずんば可らず。

本學當局、風に轉る所あり、大正七年他校に先して新聞講座を設け専任講師として、本學を友にして新聞記者名を培はる工藤鐵男氏を聘し同講座の担任を囑し、殆く學生をして自由聽講せしむ。聽講者常に題目の多きを數へ勃然たる新聞研究の機運は勿も校内に漲り、自然の要求として新聞學會の誕生を見、工藤教授に加ふるに斯望威威者野氏を以てし或は研究會、或は講演會を開催して著分その目的に向つて今日迄進み來りたるも、今や會員の數各科を通じて二百數十名、研究心の旺盛なる當に溢るる許りにして單に従来の如き道地的研究方法のみは甘んずる能はず、此處に「日本大学新聞」を創刊して實地研究に資する所あらんとす。

「日本大学新聞」の發行は因より新聞學會の一事に屬すと雖も、その結果たるや本學に影響する所少からず、是を以て我等は此の際、全學一致の應援の下に事成さんと欲し廣く學生諸君に新聞發行の意圖を披瀝し、御賛同を懇望せんとするものなり。

新聞の内容に關しては殊々發表せし如く、日本大學グループに關する凡ゆる趣味あり益あり且必要な事件を報道して、日本大學を生活に能らしむると共に或は些か要道人心を益するに足る事實採擷なる論議、或は本學關係者、有爲の上の紹介其の餘を以て、更に本學を風を培はるる勇氣と意氣を全紙面に横溢せしめて、本學を天下に發揚せん事を期す。

吾人は因より全力を擧げて事に任はん事を期すべし、成否の如何は全學生徒に各校各段の御同情に依るものたるや言を俟たず、願くは愛校の上、來りて御賛同あらん事を。

大正十年九月

日本大学新聞學會

會長 工藤 鐵 男

創立準備委員

藤 三 依 彦	高 田 正 之
精 三 實 行	山 田 正 之
弘 一 實 行	山 田 正 之
一 義 一 實 行	山 田 正 之
三 義 一 實 行	山 田 正 之
三 義 一 實 行	山 田 正 之
武 法 五 郎	山 田 正 之
山 田 正 之	山 田 正 之

『日本大学新聞』発行趣意書（大正10年9月）

大正期は第一次世界大戦や米騒動などが発生するという社会情勢の中、労働運動や女性運動などの社会運動が活発化した時期でした。当時、印刷技術の向上により、新聞・雑誌が急増しましたが、このことは大学新聞の創刊にもつながりました。『日大新聞』創刊頃の内容を見ると、普通選挙運動、社会改造、婦人運動などをテーマとした雄弁大会が盛んに開催されており、大正デモクラシーの雰囲気を読み取ることが出来ます。

また、本学が大学スポーツに力を入れ始めたのも日大新聞創刊と同時期であることから、本紙を紐解くことで本学の学生スポーツの変遷、発展を把握することができます。本年で100周年を迎える『日本大学新聞』は、これからも本学を学生の視点で記録する貴重な情報源として続いていくことでしょう。



日本大学新聞学会主催で開かれた東都8大学新聞連盟の会合（大正15年1月）

（松原）

【参考文献】

- 『日本大学新聞五十年の歩み』（日本大学新聞社、昭和46年）
- 『慶應義塾百年史（中巻・前）』（慶應義塾、昭和35年）

出征・入隊した教職員① — 『日本大学新聞』の記事から—



西川長太陸軍少尉戦没の記事『日本大学新聞』第281号

平成30（2018）年に当課が刊行した『日本大学学徒兵調査報告書』では、昭和12（1937）年から20年までの出征学徒に関する情報をまとめましたが、教職員に関しては対象としませんでした。そこで、今回の特集を契機に、『日本大学新聞』の記事から教職員についての出征情報を取り上げることとしました。初回は、昭和12年から13年の出征者を対象とします。

対象は、大学のみならず高等工学校や普通部（中学校・商業学校など）といった、全教育機関の教職員。召集のみではなく、医療や技術関係部門などへの志願者も対象としています。ただし、現在別法人（特別付属を除く）となっている近畿大学や大阪高

校の前身校は扱いません。また、配属将校については、出征は陸軍内の人事異動の一環であるため、別途検証する予定です。

昭和12年7月7日の「日中戦争」勃発以降で、出征教職員最初の紙面掲載記事は第281号（昭和12年9月20日付）に載った、工学校の教練兼剣道教師の西川長太が、9月13日に戦死したことを伝えた記事です。満州事変にも出征した西川は陸軍少尉で待命となった後、11年9月に工学校の教師となりました。7月30日の応召に際しては退職して臨んでいます、本学からの出征者と扱うことに異論はないでしょう。

同紙面には、日本大学中学校生徒1,300名が、向島牛島神社で戦勝祈願参拝を行ったとの記事が続いており、出征中の同校関係者は教職員3名と卒業生20数名とあります。氏名の掲載はありませんが、第292号（昭和13年3月5日付）に、日本大学中学校後援会が出征中の教職員、井坂・高橋・石郷岡3氏の留守宅に慰問金を送ったとあり、この3名と思われます。

昭和12年から13年の出征数は67名（表）、このうち教練教師などの予備役軍人が22名と約3分の1に及んでいます。また、短期現役軍医への志願者を含め専門部医学科から13名が軍医となっています。戦没者は、西川の他に予科文科助教授成富茂夫（12年8月25日応召／同年10月13日戦没）と法文・商経科担当教練教師鈴木忠兵衛（12年応召／13年9月25日戦没）の2名。両名とも三崎町の大講堂で葬儀が行われ、成富助教授は、戦没日付で教授となっています。



鈴木忠兵衛陸軍准尉（戦没時少尉）
『昭和13年度 日本大学商学科卒業記念（アルバム）』

（高橋）

教職員の出征者・入隊者数

出征・入隊年 部科別	昭和12年				昭和13年		年不明		合計	
	人数	教練等	戦没数	教練等	人数	教練等	人数	教練等	人数	教練等
本部又は部科不明	3				3				6	0
法文・商経	1	1	1	1	2	2			3	3
芸術科	1								1	0
工科	6	5	1	1	1	1	1	1	8	7
医科					12		1		13	0
歯科	2				5	1			7	1
予科文科	2		1						2	0
予科理科	2	2					1		3	2
第一普通部	4	1			7	3			11	4
第二普通部	7	2			3	2			10	4
第三普通部	1	1							1	1
第四普通部	2								2	0
合計	31	12	3	2	33	9	3	1	67	22

- * 昭和13年の出征者・入隊者と年不明者に、戦没の記事はみられない。
- * 文系の学部と専門部、工学部・専門部工科・工業学校・工学校では兼務者もあるため、まとめて1部科とした。
- * 教練等は、予備役軍人でその経歴により学校教練などに携わる職に雇用されていた者の人数。
- 『日本大学新聞』第281号（昭和12年9月20日付）～第319号（昭和14年7月7日付）より。

「幻の東京オリンピック」と学生勤労奉仕

昭和6（1931）年10月28日、東京市会に、紀元二千六百年を記念し、かつ帝都繁栄の一助とするために、オリンピックを東京市に招致することを求める建議案が提出され、満場一致で採択されました。その後様々な活動が展開され、昭和11年7月31日のIOC総会において、昭和15年に東京で第12回オリンピック大会が開催されることが決定しました。

日本初となるオリンピック開催が決まったものの、その実施を巡っては、組織委員会の構成、競技場の選定、実施競技の選定などの問題が山積していました。なかでも競技場の選定に関する議論は、様々な思惑により紛糾します。ようやく主会場が神宮外苑競技場と決定したのは昭和12年2月のことで、この頃には、国内で議論を繰り返すばかりで遅々として進まない日本の対応に対し、国際社会からは果たして本当に日本での開催が可能なのか、疑念の目が向けられるようになっていました。

東京オリンピック開催は更なる問題に直面します。昭和12年7月の盧溝橋事件を皮切りに、日中間の緊張関係が一気に高まったのです。これにより国内でも東京大会挙行の可否論が台頭するようになりました。

こうした状況下で東京市は、昭和13年3月、同月カイロで開催されるIOC総会で東京オリンピックの準備が順調に進んでいることをアピールするため、芝浦九号埋立地での自転車競技場の建設に着手することを決めました。実は、オリンピックまであと2年ほどであるにも関わらず、この時点で建設が進んでいたのは埼玉県戸田村の漕艇場だけだったのです。

4月29日、芝浦の自転車競技場の地鎮祭が天長節に合わせて挙行されるとともに、建設予定地の近くにオリンピックにちなんだ名前の「五色橋」が開通しました。競技場の建設には、各大学の学生、東京市連合青年団、日本自転車連盟、土木報国連盟員など、延べ13,000人が勤労奉仕する予定となっていました。学生たちがオリンピック関係の建設工事に動員された背景には、昭和12年8月24日の国民精神総動員実施要綱の閣議決定、翌13年4月1日の国家総動員法制定が関係していました。6月には文部省から各大学に対し「集団的勤労作業運動実施二閣スル件」が通達され、この建設工事は東京市初のオリンピック関連施設の建設工事であると同時に、戦時体制に入った東京市での最初の勤労奉仕となりました。

勤労奉仕には、6月中旬の時点で4,000名を超える学生からの申し込みがありました。内訳は表の通りです。7月頃には東京工業大学、東京文理科大学、早稲田大学、立教大学の学生も参加したようです。

芝浦自転車競技場の建設工事は6月21日から開始されました。勤労奉仕の第一日目であるこの日の担当となったのが、本学の学生たちでした。東京市初の事業ということもあり、このことは翌22日の新聞各紙で報道されました。また『日本大学新聞』第300号（昭和13年6月25日付）でも勤労奉仕について詳しく紹介しています。記事によれば、初日に参加したのは本学拓殖科の学生199名と教職員3名の計202名です。勤労奉仕初日の朝、作業開始に先立ち、帝都青年労働奉仕団結成式が開催されました。結成式には本学学生のほか、参加各大学の代表、参加団体代表や関係者約600名が参加しました。結団式で奉仕団全体の代表として本学学生の山田重男が宣誓を行ったこと、万歳奉唱を発声した松永東京市会議長と開式挨拶を行った大迫市民動員部長が本学法科出身であること、学生の指揮に当たった鈴木港湾部長と上野港湾部技術課技師が本学工学部で教鞭を執っていることから、「恰も日大デーの観を呈した」と評されました。

ところが、工事に掛かってから1か月も経たない7月14日、厚生省は時勢を鑑みてオリンピックを返上することを決定、翌日、組織委員会からIOC本部へ返上が打電されました。

芝浦自転車競技場建設勤労奉仕申込内訳

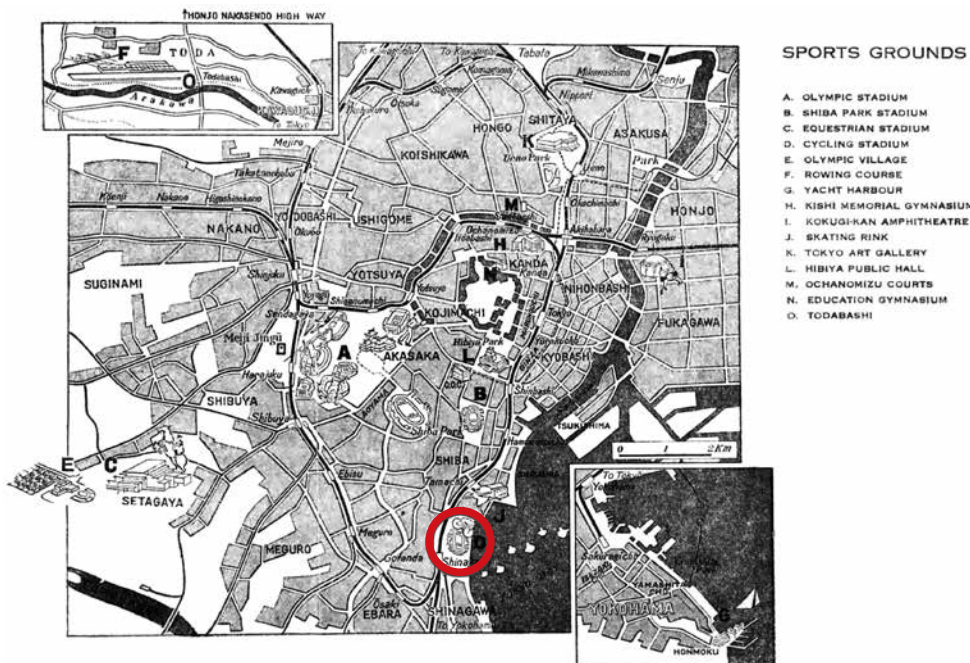
学校名	申込者数
上智大学	1,500
法政大学	1,000
専修大学	300
明治大学	250
東洋大学	250
日本大学	200
拓殖大学	200
駒澤大学	200
國學院大學	80
日本医科大学	60
慶應義塾大学	40
東京農業大学	40
大正大学	20
合計	4,140

『朝日新聞』昭和13年6月14日号より作成

残念ながら昭和15年の開催は返上となりましたが、東京市はすでに建設に着手している自転車競技場については、多数の学生の勤労奉仕に報いるため、また同地の緑地計画に基づき、改めて「学生体育訓練道場」を建設することを決めます。

その後、学生たちが勤労奉仕で整備した芝浦の地は、昭和39年の東京オリンピックにおいても自転車競技場の候補となりましたが、最終的には八王子市に決まりました。現在、かつての芝浦九号埋立地には港区立港南図書館などが建っており、競技場の面影はありません。しかしその近くの橋には今も「五色橋」の名前が残っており、当時の名残を感じることができます。

(上野平)



競技場建設計画

品川駅横のDで示される箇所（○で囲んだ部分）が、学生たちが勤労奉仕を行った芝浦自転車競技場。
 出典：「第十二回オリンピック東京大会一般規則及びプログラム：昭和15年」（昭和13年、国立国会図書館デジタルコレクションより）

【参考文献】橋本一夫『幻の東京オリンピック』（日本放送出版協会、平成6年）

箱根駅伝に8回出場した曾根茂



曾根入学時の記事『日本大学新聞』第75号（一部編集）

戦前の『日本大学新聞』には、多くの陸上競技部の選手が、箱根駅伝初優勝をめざして、挑戦し続けた苦闘の歴史が記されています。箱根駅伝8回出場最多記録を持つ曾根茂もその一人です。曾根は、大正15（1926）年4月、大成中学校（現大成高等学校）から日本大学予科に入学し、昭和9年3月に法文学部法律学科を卒業するまで、第8回大会から第15回大会まで連続出場しています。当時の規則では、在

大会回数	区間	順位	日本大学順位 () 参加校	優勝校
第8回大会 (昭和2年)	第10区	5位	5位 (5校)	早稲田
第9回大会 (昭和3年)	第4区	3位	3位 (10校)	明 治
第10回大会 (昭和4年)	第3区	1位	3位 (9校)	明 治
第11回大会 (昭和5年)	第3区	4位	9位 (9校)	早稲田
第12回大会 (昭和6年)	第3区	4位	4位 (10校)	早稲田
第13回大会 (昭和7年)	第5区	1位	2位 (9校)	慶 應
第14回大会 (昭和8年)	第5区	3位	3位 (11校)	早稲田
第15回大会 (昭和9年)	第5区	2位	2位 (13校)	早稲田

曾根の箱根駅伝の成績 (『箱根駅伝七十年史』より作成)

えた早稲田大学と明治大学が圧倒的に強く、当時3連覇すると、優勝旗を永久に所持することができたので、両校を中心に3連覇をめざした争いが繰り広げられていました。日本大学は第3回大会 (大正11年) から出場していますが、しばらく成績は振るいませんでした。第9回大会 (昭和3年) で、選手らの懸命な努力がようやく実り、初出場以来、数年にわたって下位に低迷していた日本大学は、総合で一躍3位となりました。この時、曾根は第4区を走って8位から5位に順位を上げています。第13回大会 (昭和7年) では、曾根は第5区の区間賞を獲得し、往路初制覇に大きく貢献しました。しかし、復路は第9区までトップを走っていましたが、第10区で慶應義塾大学の北本正路 (ロサンゼルス五輪1万m代表選手) の猛追を受け、同区の出発時点で6分以上あった差が、ゴール近くの芝増上寺前で逆転されてしまいました。

結局、曾根の在学中は何度が優勝に手の届きそうなどころまで行きながら、それを果たすことはできませんでした。しかし、日本大学は、翌年の第16回大会 (昭和10年) で悲願の初優勝を遂げると、その後第19回大会 (昭和13年) まで4連覇を達成し、「駅伝王国」の地位を築きました。この連覇の立役者で、すべて第5区を走った鈴木房重は、「私は曾根先輩が昔し駅伝で箱根の山を登ったあの精神が這入る」と述べています (『日本大学新聞』第269号、昭和12年1月15日付)。曾根は後年、「駅伝は単なるリレーレースではない。10人のチームメイトとともに母校を背負っているとの感激と感動で走っているのである。だから無名の選手がものすごい記録を出し、ある時は倒れてもなお走り続けるのだ」と述べています (『第九回大会で日大の地位確立』『箱根駅伝七十年史』)。ピンクのタスキを何としても、仲間とともに優勝のゴールに運びたいという一念で、ぎりぎりまで留年して走り続けた曾根は、古豪日本大学の礎を築いた選手といえるでしょう。

(小松)

学していれば出場回数に制限はなかったので、卒業に必要な単位を1科目残し、優勝をめざして留年し続けたと言われています。曾根の入学時の『日本大学新聞』第75号 (大正15年4月20日付) には、本学陸上競技部主催の校内マラソンで2着の実績を持つ、期待の新人として紹介されています。当時校内マラソンは、新人勧誘のため、付属校以外の中学生の参加も認めていました。左の表は8年間の曾根の成績で、ほとんど当時のエース区間の第3区と難関の第5区 (山上り) を走っています。

この頃の箱根駅伝は、学生陸上界のトップランナーを多く揃



第9回大会 (昭和3年)
小田原中継所の前で、タスキをはずそうとする曾根



昭和6年2月 曾根茂と国沢利明の東京・銚子間寒耐マラソン
皇居前を出発 前列ゼッケンを付けた右側が曾根 (森本家所蔵)

『日本大学新聞』(欠号) 情報提供のお願い

下記の『日本大学新聞』が欠号となっております。所持されている方、情報をお持ちの方は、ご教示いただきたくお願い申し上げます。

43～46, 52, 61, 65, 70, 72～73, 76, 80～82, 88～99, 103～107, 109～113, 120～163, 165～173, 175～178, 180, 185～207, 210, 213, 217, 219, 221～249, 270, 322, 392～394, 398～400, 402, 404, 412, 414, 416～417, 419～434, 436～437, 486, 501～504, 510～512, 514～519, 624

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24 日本大学会館8階
日本大学企画広報部広報課(大学史編纂) E-mail:nuhistory@nihon-u.ac.jp
TEL 03-5275-8444 FAX 03-5275-8094

母校に関する資料が皆さんのそばに眠っていませんか

資料・情報提供のお願い

広報課(大学史編纂)では「日本大学史」に関する資料を広く収集しています。本学の歴史・学生生活・校友の足跡等のようなことでも結構ですので、お気軽にご連絡ください。

活動報告

令和2年7月～令和2年12月
(大学史に関する活動)

○調査研究等

12月22日 古橋廣之進関係資料調査(日本水泳連盟)

○展示

8月31日～12月17日 「理工学部までの道のりー理工学部創設100周年ー」(日本大学会館2階)
12月18日～3月末日予定 「新制日本大学の出発」(日本大学会館2階)

○講演・報告

8月 新規採用教職員研修 学祖講演(パワーポイント・動画作成)
9月 日本大学藤沢高等学校・中学校 学祖及び大学史講演
(パワーポイント・原稿を作成)

日本大学大学史ニュース 第20号

2021年2月15日 発行

編集・発行 日本大学企画広報部広報課
〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24
TEL 03-5275-8444 FAX 03-5275-8094

印刷 株式会社 日本大学事業部